創られた独裁者：プロパガンダの脅威<4>

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大木, ゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6902

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

創られた独裁者―プロパガンダの脅威＜4＞

大　木　ゆ　み

はじめに

'Tinker, Tailor, Soldier, Sailor, Rich Man, Poor Man, Beggar Man, Thief'.（「鋳掛け屋さん，仕立て屋さん，兵隊さん，船乗りさん，お金持ち，貧乏人，乞食，泥棒」*Mother Goose*）―これは子供が自分の将来の職業を占う時に，また女の子が未来の結婚相手を占う時に歌う遊び歌である。そして John le Carré によるイギリスのスパイ小説 *Tinker Tailor Soldier Spy*（1974）においてこの nursery rhyme に登場する職業は作中のスパイたちのコードネームとして使われている。この作品は実際の Kim Philby（以下キム・フィルビー：冷戦期に暗躍した‘Cambridge Five’と称されるイギリスとソ連の二重スパイ集団の一人）の事件を基に書かれているようだが，イギリスは実はスパイ小説の宝庫であり，*Casino Royale* から始まる James Bond シリーズ（1953-1964）を世に送り出した Ian Fleming や *The Power and the Glory*（1940）の Graham Greene など作家自身が諜報機関（MI5, MI6 等）経験者 であることも多い。小説などによりイギリスにおけるスパイは広く知られるところであったが，イギリス政府がその存在を認めたのは 1994 年と意外と最近なのである。公になる以前は，諜報員の大半がオックスフォード大学やケンブリッジ大学といったいわゆる名門校出身者であった。しかし現在では映画やドラマには欠かせない題材となっているばかりか，ウェブで諜報員の公募を行うなど非常にオープンな存在となっている。

さて，ディストピア小説と評される George Orwell（以下オーウェル）の『一九八四年』（*Nineteen Eighty-Four*, 1949）だが，作中様々なスパイが登場している。『一九八四年』におけるスパイといえば，まず，主人公 Winston Smith（以下ウィンストン）を罠に嵌める全体主義国家 Oceania（以下オセアニア）の党の内務局員つまり上級官僚の O'Brien（以下オブライエン）がその筆頭であろう。また，ウィンストンが過去の遺産であり現在は違法とされている日記を入手し，恋人 Julia（以下ジュリア）と逢瀬を重ねる場所

を提供する骨董屋の主人 Charrington（以下チャリントン），機械ではあるが常に国民の監視をしているテレスクリーン，そしてスパイ団なる子供の集団など，日常のあらゆるところにスパイが潜んでおり，国民は恐怖に支配された生活を送っている。『一九八四年』における全体主義国家オセアニアはこれらのスパイを大いに活用し，国民の恐怖を煽ることで全体主義の維持を図っている。全体主義において重要な役目を担うスパイを考察するにあたり，本稿ではまず『一九八四年』に登場するスパイ的存在オブライエンの人物像を考察する。

1. 恐怖

全体主義体制におけるプロパガンダの重要性については以前より言及するところであるが，*The Origins of Totalitarianism*（『全体主義の起源』，1968）の作者 Hannah Arendt によると‘Propaganda is indeed part and parcel of “psychological warfare”; but terror is more. Terror continues to be used by totalitarian regimes even when its psychological aims are achieved: its real horror is that it reigns over a completely subdued population.’（Arendt, 344）と，恐怖はプロパガンダよりも長く存続し，その恐怖の継続が大衆支配へ大きな影響を及ぼしていることを提示している。筆者既稿 <1>，<2>，<3> の言及のとおり，恐怖に支配された大衆は社会学者フェスティンガーの提唱する認知的不協和理論，つまり自己防衛のためにあらゆる手段を講じて自己正当化を図ろうとする。そのような恐怖が支配する社会に欠かせないのが，恐怖に駆られた大衆が頼ることのできる絶対的支配者であるわけだが，絶対的支配者とは一夜にしてなれるものではなく，そうなるためにも大衆との絶対的信頼を築く必要がある。この信頼を築く上で欠かせないものがプロパガンダであり，プロパガンダに溢れた社会は全体主義確立のための第一段階なのである。一方で恐怖は全体主義成立過程から成立後も社会の中に蔓延り，結果として絶対的支配者と恐怖に支配された大衆の絆を強める。つまり恐怖とは絶対的支配者が築き上げてきた大衆との信頼を永続させるための手段の一つなのである。

恐怖と信頼，一見相反するように見えるが，両者は密接な関係にある。信頼があるゆえの裏切ることができない恐怖（罪悪感），信頼があるからこそのそれを失う恐怖（喪失感），失ってしまった後の不確かな未来への恐怖（不

安感）といったような恐怖が大衆を襲う。『一九八四年』におけるオセアニアはまさに全体主義成立後の恐怖に支配された世界である。そのため，国民は常にあらゆる恐怖に支配されている。党のプロパガンダ制作の仕事を担う真理省に勤務する強い劣等感を抱く主人公ウィンストンは最後—国家により洗脳され，銃殺される直前—を除いて常に恐怖に支配され，それゆえ自ら失敗を招く典型として描写されている。筆者既稿でも提示してきたように，日々プロパガンダを作り続けるウィンストンは国家体制に反感を持ちながらも全体主義に従わざるを得ない現実に葛藤すると同時に嫌気が差していた。そんな中，偶然骨董屋で見つけた過去の産物にして現在では禁止されている日記を手に入れる。彼の住む社会では記述は筆記ではなく全て口述記を使用するのが一般的であり，また義務でもあった。さらに，個人の思想は国家により厳密に統制され，反社会的と認識されれば思想警察なるものに逮捕されてしまう。だが，全てを承知の上でウィンストンは日記に自らの想いを書き記し，未来へ託すことを選ぶ，つまり彼は反逆者となるのである。

そんなウィンストンを欺くスパイが二人いる。オセアニアの党の内務局員オブライエンと，ウィンストンが日記を入手し，恋人ジュリアとの逢瀬を重ねる骨董屋の店主チャリントンである。特にオブライエンの欺き方は実に巧妙である。

2. オブライエン

> O’Brien had turned himself a little in his chair so that he was facing Winston.... For a moment the lids flitted down over his eyes. He began asking his questions in a low, expressionless voice, as though this were a routine, a sort of catechism, most of whose answers were known to him already. (179)

オブライエンは自らを頼ってきた国家反逆を目論むウィンストンに対して反逆行為に手を染める覚悟を問いただす。

> ‘You are prepared to give your lives?’; ‘You are prepared to commit murder?’; ‘To commit acts of sabotage which may cause the death of hundreds of innocent people?’; ‘To betray your country to foreign powers?’;

> ‘You are prepared to cheat, to forge, to blackmail, to corrupt the minds of children, to distribute habit-forming drugs, to encourage prostitution, to disseminate venereal diseases—to do anything which is likely to cause demoralization and weaken the power of the Party?’; ‘ If, for example, it would somehow serve our interests to throw sulphuric acid in a child’s face—are you prepared to do that?’; ‘You are prepared to lose your identity and live out the rest of your life as a waiter or a dock-worker?’; ‘You are prepared, the two of you [Winston and Julia], to separate and never see one another again?’（179-180［　］内は筆者による）

これらは諜報員が実行する類の行動に対しての質問であり，いわゆる破壊活動に対する意思確認も見られる。オブライエンも反政府的思想を持っている同類だと思い込んでいるウィンストンは最後の一問を除いて‘Yes’と回答し，自らの反逆行為への強い意思表明をする。

さて，これらの質問は何を意味するのか—それはウィンストンと彼の恋人ジュリアが国家反逆罪で逮捕された後，判明する。ウィンストンが唯一‘No’と答えた質問，‘You are prepared, the two of you [Winston and Julia], to separate and never see one another again?’（180）こそが彼らの弱点となる。彼らは逮捕後別々に収監され拷問を受ける。そして結局は互いを裏切る—つまり互いに強い絆で結ばれていたかのように思っていたウィンストンとジュリアは，二人の別れ際にジュリアが吐き出す台詞，‘All you care about is yourself’（305）でしかなかったのである。オブライエンは，人との絆を渇望していたウィンストンに愛情など所詮は幻と言わんばかりの最大の絶望を与えることでウィンストンの人間性を崩壊させた。ウィンストンの憧れであるはずだったオブライエンは実は党内の「反逆者炙り出し作戦」を牛耳るばかりか自ら実行する冷酷な諜報員としての顔も持っていたのである。

3. オブライエンとバージェス

オブライエンは，作者オーウェルの BBC 勤務時代（1941 年 8 月 -1943 年 11 月，インド帝国などの東南アジア向けのラジオ番組の制作を担当）の同僚にしてイギリスとソ連の二重スパイ，Guy Burgess（以下バージェス）がそのモデルであると言われている。バージェスは‘Cambridge Five’と称

されるケンブリッジ大学出身者によるイギリスとソ連の二重スパイグループの一人であり，彼らが起こしたソ連への亡命事件は前述の *Tinker Tailor Soldier Spy* の下敷きとされている。バージェスはケンブリッジ大学出身のエリートであり，BBC 勤務時代はラジオ番組のプロデューサーや外務省の機密情報関連の仕事を担当していた。その後 MI6（対外諜報機関，プロパガンダと破壊活動）での勤務を経て外務省の新部署で働く。

作中のウィンストン同様，強い劣等感を抱いていたオーウェルはいわゆる「エリート」の同僚バージェスが鼻についた，あるいは憧れを抱いたのかもしれない。オーウェルはバージェスと同じエリート養成の名門イートン校の出身であるが，自らの階級が上流でないこと（イートンには多数の上流階級出身者が所属しているが，オーウェルは奨学金で入学していた），また健康状態が優れないこと，身体的特徴，そしてオーウェル自身が後悔していたという言及はないが，おそらく心の底では感じていたであろう，イートン卒業後にオックスフォード大学やケンブリッジ大学への進学をしなかったことなど様々な劣等感を抱いていた。それゆえいわゆるエリートや知識人，特にロシア贔屓とされる左翼知識人に対する彼の批判は辛辣なものがある。バージェスはまさにオーウェルが「嫌う」典型だった。さらにバージェスがホモセクシュアルであったことも，当時の風潮や女好きのオーウェルから見れば異質なものに見えたのだろう。このような背景も含めて，オーウェルは自身を投影した主人公ウィンストンと対峙するキャラクター，オブライエンにバージェスを投影させたのかもしれない。オーウェルはウィンストンを通してオブライエンをこう描写する—

> The other person was a man named O'Brien, a member of the Inner Party and holder of some post so important and remote that Winston had only a dim idea of its nature....O'Brien was a large, burly man with a thick neck and a coarse, humorous, brutal face. In spite of his formidable appearance he had a certain charm of manner. He had a trick of re-settling his spectacles on his nose which was curiously disarming—in some indefinable way, curiously civilized. It was a gesture which, if anyone had still thought in such terms, might have recalled an eighteenth-century nobleman offering his snuff-box. (12)

ウィンストンにとってのオブライエンは手の届かない存在であると同時にチャーミングでもあるようで，そこに親近感を覚え，オブライエンに対して一方的に信頼を寄せている。このオブライエンのモデルとされるバージェスであるが，「彼は頭脳明晰，学業抜群，スポーツ万能，容姿端麗，性格は重厚というよりは陽性闊達，時には大言壮語もあったが雄弁家，男としてありとあらゆる魅力を兼ね備えていた」（川成，164）ようで，まさにウィンストンがオブライエンに憧れを抱いたように，オーウェルが自分の持ち合わせていないものを全て持っているバージェスに何らかの魅力を感じ，憧れを抱いた可能性も否めない。

だが，オーウェルとバージェスには決定的に相入れない相違点がある。Jeffrey Mayers が著書 *Orwell*（2001）で ‘In fact, Orwell hated propaganda and hated his job as much as Winston Smith does in *Nineteen Eighty-Four*’（Mayers, 217） とオーウェルは BBC でのプロパガンダ制作の仕事に対し，嫌悪感を抱いていたことを指摘している。確かにオーウェル自身，‘All propaganda is lies, even when one is telling the truth. I don’t think this matters so long as one knows what one is doing, and why.’（*Works XIII*, 229. <1025>）と言及するようにオーウェルのプロパガンダ嫌いは彼の書簡，日記，作品の諸所に見受けられる。そして彼のプロパガンダへの反感を明示しているのが，『動物農場』（*Animal Farm*, 1945）と『一九八四年』であろう。

一方バージェスはプロパガンダ制作を楽しんでいたようで，前述の通り機密情報を扱ったり MI6 へ所属したりとオーウェルとは正反対の道を進む。プロパガンダに対する二人の意見の相違が一方を反全体主義の作家へ，また一方を二重スパイへと導いた。

両者は同僚時代には，特に仲が良いというわけでもなく，当然だがバージェスはプロデューサー，オーウェルはアシスタントという立場上，軽く話をするくらいの仲だったようである。だが，お互いに警戒をしていた節が見られる。オーウェルは結局，バージェスを『一九八四年』において全体主義の犬である党の役人に反映しており，これは自身の嫌いなタイプであるエリート知識人バージェスに対しての妬みとも考えられるが，何らかの不信感を抱いていた可能性もある。一方，バージェスはオーウェルの反ロシアの立場を見抜き，懸念していたようだ。たとえば *The Complete Works of George Orwell*（以下 *Complete Works*）の編集者 Peter Davison は，オーウェルの研究者 W.

J. West の指摘を *Complete Works* に挙げている— 'W.J. West, who reproduces this letter wonders whether "Burgess warned Bernal about Orwell's hatred of Russian Communism"' (*Complete Works XIII*, 296. <1135>)。Bernal とはイギリスの著名な分子生物学者でX線結晶構造解析のパイオニアとして知られている共産党支持者のJ. D. Bernal である。そしてバージェスの推察通りオーウェルは反ロシアの立場を取る。

だが, 表向きはオーウェルに対する警戒心を見せていないようであり, オーウェルもまたバージェスに対して敵対するような雰囲気は見られない。オーウェルは 1942 年 6 月 7 日付の日記 *War-time Diary* にてバージェス等と話をしたことを記している— 'Last Tuesday spent a long evening with Cripps (who had expressed a desire to meet some literary people) together with Empson, Jack Common, David Owen, Norman Cameron, Guy Burgess and another man (an official) whose name I didn't get.' (*Complete Works XIII*, 351 <1211>)。この日記ではバージェスに関しての言及は名前以外特にない。オーウェルは好き嫌いの激しい人間であることは彼の書簡や日記などから判断することができる。彼の場合は, 嫌いなものに対しては誰であれ何であれ, とにかく辛辣な批判をすることが一つの特徴である。だが, オーウェルの書簡や日記にバージェスに対する辛辣な批判は見られない。つまり少なくとも, BBC で同僚として接していた時はそこまで毛嫌いするほどではなかったのだろう。Bernard Crick は *George Orwell: A Life* (1992[1980]) において W. J. West の指摘を引用しながらバージェスとの関係も含む BBC の『一九八四年』への影響を考察している—

> Some details, certainly are BBC: the cubicles, the corridors, the canteen, and Room 101 was where the Eastern Services Committee met. But the degree of his obsession can be seen when he suggests that Guy Burgess, who was a Talks' Producer at the BBC at the same time, thus a colleague, was 'a colleague and friend' [sic] and could have been "a model for O'Brien" in *Nineteen Eighty-Four*. 'As one of the three men in the BBC who had commissioned talks on Basis—Orwell, Empson and Guy Burgess—Orwell might well have been stopped in the corridor, like Winston Smith…, and praised for his interest in language.' Or might not.

He is as prodigal with mites as the Biblical poor widow.（Crick, 598-599；文中 Crick による引用は W.J. West, *Orwell: The War Broadcasts*, 62,67）

BBC 勤務時代が『一九八四年』に影響を与えていることは Crick の指摘通り BBC の建物などの外部的および内部的特徴の類似からも認めることができる。そして，傑作『一九八四年』が彼の BBC 時代を反映していることからもオーウェルにとってその時代が彼の人生において重要な位置を占めていると言える。

劣等感の塊であるオーウェルはもしかすると全てを持っているバージェスへの憧れと嫌悪という葛藤に揺れたのかもしれない。その葛藤をウィンストンとオブライエンの関係に反映したのだろうか。

一つ奇妙なことは，オーウェルはいかにしてバージェスがスパイであることを嗅ぎつけたのかということである。というのもオーウェルはバージェスが亡くなる 1963 年よりも 13 年前の 1950 年に亡くなっているばかりか, バージェスのソ連への逃亡劇はオーウェルの死後に行われたものであり，当然オーウェルの知るところではない。本件については次回以降考察する。

4. おわりに

我が子でさえも自らの敵となりうる社会となっては，もはや親子，家族の絆や信頼など存在しない。一方で，不気味なことに国民は党の絶対的指導者 Big Brother（以下ビッグ・ブラザー）との信頼を築いている。ウィンストンにはキャサリンという別居中の妻がいるが，子供ができないなら別居を推奨するという党の意向に従って別居している。夫婦の絆が子供―しかも子供は党にとっての道具となる―だけであり，夫婦間の愛情は存在しないことがオセアニアでは一般的となっている。そんな中ではっきりした記憶がなく曖昧であるが，ウィンストンは度々家族を，特に母親を思い出す。

Winston was dreaming of his mother. He must, he thought, have been ten or eleven years old when his mother had disappeared. She was a tall, statuesque, rather silent woman with slow movements and magnificent fair hair. His father he remembered more vaguely as dark and thin, dressed always in neat dark clothes (Winston remembered especially the very thin

> soles of his father's shoes) and wearing spectacles. The two of them must evidently have been swallowed up in one of the first great purges of the 'fifties. At this moment his mother was sitting in some place deep down beneath him, with his young sister in her arms. He did not remember his sister at all, except as a tiny, feeble baby, always silent, with large, watchful eyes.' (31)

党のスローガンの一つ 'Who controls the past controls the future: who controls the present controls the past' (37) に則った偽りの歴史に支配された社会にいてもなお，ウィンストンは洗脳されることなく度々実際に起こった過去を思い出す。それはウィンストンが人間として正常であることの証でもあり，それゆえ人との繋がりを渇望している。本稿 2 で提示したようにオブライエンがウィンストンに投げかける問いを一つずつ実行するごとに彼は人間性を失っていく。ウィンストンが最後の問いにだけ，つまり自分と親密な関係にあるジュリアとの絆を断ち切れなかったのは，その時点において彼はまだ人間だったからである。逮捕後，ジュリアを裏切ったウィンストンはもはや人間で無くなってしまった。

> He was in the public dock, confessing everything, implicating everybody. He was walking down the white-tiled corridor, with the feeling of walking in sunlight, and an armed guard at his back. The long-hoped-for bullet was entering his brain.... But it was all right, everything was all right, the struggle was finished. He had won the victory over himself. He loved Big Brother. (311)

密告に対して違和感と反感を抱いていたウィンストンが罪悪感もなく，感情的になることもなく平然と密告をしている。全体主義国家にしてみればいかにして国民の自我や人間性を喪失させるかが主義を維持をする上で重大事項となっている。ターゲットの弱点を見抜き最大の恐怖を与えることのできるオブライエンはまさに全体主義には必要不可欠な存在，むしろ全体主義そのものだと言えるだろう。

主要参考文献

The Complete Works of George Orwell. Ed. Peter Davison. 20 Vols. London: Secker & Warburg, 1996 (1986).

Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*. Orlando: Harcourt, 1994 (1948).

Crick, Bernard. George Orwell: *A Life*. London: Penguin, 1992 (1980).

Mayers, Jeffrey. *Orwell*. NY: W.W. Norton & Company, 2000.

川成洋. 『紳士の国のインテリジェンス』. 東京：集英社, 2007.

Holzman, Michael. *Guy Burgess: Revolutionary in an Old School Tie*. NY: Chelmsford Press, 2013. Kindle Edition.

Le Carré, John. *Tinker Tailor Soldier Spy*. London: Penguin, 2018 (1974). Kindle Edition.

『裏切りのサーカス』. ギャガ. 2012 (2011). Amazon Prime Video Edition.

＊ページ番号のみ記載の引用は全て George Orwell. The Complete *Works of George Orwell IX: Nineteen Eighty-Four.* London: Secker & Warburg, 1987 より引用。

＊本稿は筆者既稿「創られた独裁者―プロパガンダの脅威 <1>, <2>, <3>」を参考にしている。

＊QACHGDXSYMOIPPLQACLPWOATXYLBEINCHMSATTW